令和６年度（2024 年度）	小学校生活科用

「新編　あたらしい　せいかつ」

複式年間指導計画
作成補助資料

令和５年（2023 年）12 月版

※単元ごとの配当時数、主な学習活動、評価規準などは、今後変更になる可能性があります。ご了承ください。

東京書籍

複式年間指導計画について

1 複式学級における生活科年間指導計画の基本

指導計画作成にあたっては、以下の点を重視する。

(1) 生活科の目標、内容との関連を押さえる。

(2) 児童一人一人の実態を考慮する。

(3) 地域の環境を生かす。

2 複式学級における生活科の学習形態

ここでは、第１学年と第２学年から構成される複式学級の、生活科の学習形態を考えてみる。

生活科の目標、内容は、２学年共通で示されている。児童の発達の段階や成長を踏まえ、単元を構成し、配列することが重要である。２学年間を見通して２学年同単元(A・B 年度方式)を効果的に配置し、指導計画を立てて、指導することで複式学級の特性を生かしていきたい。

例えば１学期前半は、入学直後の１年生と、進級した２年生から構成されるため、両者の発達の違いが大きい時期である。両学年の違いに配慮せずに、同単元同内容同程度の指導を進めていくと、複式異学年集団である「よさ」を生かすことができない。

そこで、児童の実態に応じて、同単元異内容異程度や同単元同内容異程度(目標を学年ごとに設定する)など、多様な指導を取り入れていく必要がある。

このように、異内容あるいは異程度の指導を取り入れると、A・B 年度に共通の単元を単元を繰り返し設定し、活動の場や対象は同一になる場合でも、活動のめあてを学年段階に応じたものとすることができる。

その中で、児童の活動がより深まるとともに、異学年との関わりが生きてくるのである。

3 年間指導計画作成上の留意事項

(1) 学習活動や時数配当のバランスを工夫する。

(2) 学年差や個人差を考慮して単元配列をする。

(3) 変則複式学級の指導計画を工夫する。

(4) 複式学級の特性を生かす。

(5) 身近にいる人々との関わりを生かす。

(6) 幼稚園、保育所などとの交流・連携を図る。(スタートカリキュラム等)

4 教科書を活用する

複式学級の特性をより生かすという観点から、教科書の活用方法も工夫したい。

(1) 異学年の違いを生かす。

教科書の同単元を扱う場合も、同内容同程度で指導するだけでなく、同内容異程度や異内容異程度で指導をすることにより、異学年集団であることの「よさ」を生かしたい。

例えば、教科書の学校探検ページでは、１年生には「がっこうの すてきな ところを みつけよう」、２年生には「学校の すてきな ところを １年生に 教えよう」という違った視点でA・B 年度共通に繰り返し行う。１年生は、来年の自分の姿を思い描きながら、単元終了後も、ふだんの生活の中で学校探検を続けていくことだろう。

(2) 周囲の環境に目を向ける。

自分の周りの自然の面白さや変化に気付くきっかけとして、積極的に教科書を活用したい。例えば、季節の公園イラストを活用し、同じ場所を繰り返し観察したり、自分の地域に対して愛着を深めたりしていくことへのきっかけとしたい。

(3) 少人数集団を活性化させる。

複式学級は、少人数であるために、一人一人が自分の気持ちや考えを発表する機会を多く得ることができる一方で、多様な表現に触れる機会が少なくなりがちである。児童の発想をより豊かにするために、教科書の多様な児童作品を活用したい。

このように、教科書を有効に活用することで、児童の世界を広げていく工夫を意図的に進めたい。

5 指導計画の見直し

作成した指導計画を基に学習指導を行っても、計画どおりにいかない場合が出てくる。年間指導計画、単元展開計画などについての見直しを、絶えず行うことが大切である。

複式カリキュラム　モデル案

■複式カリキュラム（モデル案）について

(1) 内容をA・B年度に分け、A年度、B年度で異なる単元（「なつが やってきた」「どきどき わくわく まちたんけん」など）と、毎年実施する共通単元とで構成した。

(2) 単元は、同単元同内容を基本とするが、学年差を考慮し、一部を同単元異内容とする（「みんなで そだてよう」「つくって あそぼう」など）。

(3) 同単元同内容の単元は、学習活動は、原則として同じである。そのため、1年生がB年度、2年生がA年度を学習する場合の留意点を示した。

(4) 年間授業時数は、A・B年度ともに、第1学年は102時間、第2学年は105時間である。

(5) 時数は複式指導に合わせて調整した。

	4月	5月	6月	7月	8月
A年度（45時間） ※㋐㋑は二年生が学習する場合の留意点		○がっこう だいすき ⑩ ㋐学校紹介を異学年や保護者、地域へも発信する。	○なつが やってきた ⑧ ㋐地域との結び付き、暮らしの工夫や行事など、自分の生活との関わりまで意識を広げる。		
共通（60時間）	○がっこう だいすき ⑩ ・幼児期の学びと育ちを踏まえたスタートカリキュラムを行う。 ・学校の施設や通学路の探検などの体験活動を2学年一緒に行って触れ合うことにより、楽しく安心して生活できるようにする。	みんなで そだてよう 〈第一学年〉 ○はなを さかせよう ⑦ ・たねまき、発芽、開花の時期が適切なもの、低学年の児童でも栽培が容易なもの、植物の成長の様子や特徴が捉えやすいものを考慮する。 〈第二学年〉 ○ぐんぐん そだて わたしの 野さい ⑩ ・地域や児童の実態に応じて、適切なものを栽培する。 ・確かな実りを実感でき、満足感や達成感を得られるものを選択する。			
B年度（45時間） ※㋐㋑は一年生が学習する場合の留意点		○春だ 今日から 2年生 ② ㋐学校の周りを歩き、地域への関わりのきっかけとする。 ㋑2年生と一緒に活動することで安心して学ぶことができるようにする。	○どきどき わくわく まちたんけん ⑧ ㋐地域のさまざまな物、ことから人への関わりへ広げる。 ㋑繰り返し関わる活動ができるようにする。	○生きもの なかよし 大作せん ⑧ ㋐自分の思いに合わせて生き物を飼育する。 ㋑2年生が飼育する姿を見ながら憧れをもって活動できるようにする。	

■単元の展開

(1) A年度は、四季を通して公園で活動し、B年度は、地域の探検活動を行うことにより、2年間を通して地域の自然や社会との関わりに関心をもつことができるように配慮した。なお、モデル案は公園での活動を想定したが、地域の実情に応じて、児童にとって身近な活動の場を活用したい。

(2) 毎年実施する単元を設定した。単元名が同じであっても、学年ごとに異内容や異程度で指導する。

(3) 栽培活動は、毎年実施する単元としたが、2年間同じことの繰り返しにならないように、年度ごとに児童の実態を把握し、内容を決める。

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
○いきものとなかよし ⑧ ㋐B年度の飼育経験を生かす。 ㋑多様な生き物に触れる。	○たのしい あきいっぱい ⑩ ・校庭や公園で秋を探したり、自然遊びをしたりする活動を行う。 ㋐B年度の公共施設利用経験を生かす。 ㋑経験を生かせるもの、より多様なものとなるよう探究活動や発表を工夫する。	○ふゆをたのしもう ⑨ ㋐地域との結び付き、暮らしの工夫や行事など、自分の生活との関わりまで意識を広げる。				
		つくってあそぼう 〈第一学年〉 ○たのしい あきいっぱい ⑫ ・身近な自然物を使って、遊びや遊びに使う物をつくる活動を行う。 〈第二学年〉 ○うごく うごくわたしの おもちゃ ⑫ ・身近にある物を使って、動くおもちゃをつくる活動をする。		あしたへ ジャンプ 〈第一学年〉 ○じぶんでできるよ ⑫ ・家庭生活に関わる活動をする。 ○もう すぐ 2ねんせい ⑮ ・入学してからの自分の成長を振り返る活動をする。 〈第二学年〉 ○あしたへ ジャンプ ㉗ ・異年齢との交流も含めて、自分が心身ともに大きくなったことを振り返る活動をする。 ・自分の成長の様子と関わりをもった人、物、ことへの振り返り活動をする。		
○みんなでつかう まちのしせつ ⑥ ㋐地域に何があるのか、その施設を使うことの楽しさやよさを感じることができるようにする。	○もっと なかよし まちたんけん ⑪ ㋐児童の思いや願いを生かし、繰り返し地域の物・こと・人と関わる活動をする。	○つながる 広がる わたしの 生活 ⑩ ㋐伝える対象を校内・保護者・園児などにし、関わりを広げながら触れ合い、交流できるようにする。 ㋑実態に合った多様な表現をする。(劇・歌など)				